〈研究ノート〉

本学における介護福祉士養成教育実践の総括
～「本学介護福祉士養成課程コース設置構想」にてらして～

横　山　孝　子
山　口　千　果

要　約

本学における30年間の介護福祉士養成教育の意義を明らかにすることを目的に、養成課程卒業者の動向調査を実施し、その結果を「本学介護福祉士養成課程コース設置構想」に照らして、まとめとして帰結した。先ず「介護コースだから学べたこと」では、利用者の状況を介護福祉の視点から分析し課題解決するための科学的思考能力を修得できていた。これは、設置構想の【実践の中で課題を発見してその回答を求める】【介護福祉士集団のリーダーたりうる存在】としての基礎的能力が構築されていると言える。次に「社会福祉学科だから学べたこと」では、社会福祉領域の幅、視点の広がりを修得できていた。これは、【四年制大学における社会福祉専門教育のなかに介護福祉士養成カリキュラムを適切に位置づけ】られたことによる、視野の広い介護福祉士養成の成果であると考える。さらに「四年制大学だから学べたこと」では、4年間という時間をかけて社会福祉領域の専門職として、また青年期にある一人の人間として錬成されていく様態が表現されていた。これは【社会福祉に係わる質量ともに豊かな人材】の素養が涵養され、福祉専門職としてのアイデンティティが社会（実務）経験を重ねながら確立されていくものと考える。

以上のことから、四年制大学における本学介護福祉士養成教育の総括として、「本学介護福祉士養成課程コース設置構想」に謳われた意図が体現されてきたと評価できる。

はじめに

本学介護福祉士養成課程は、1994（平成6）年度の社会福祉学部設置に伴い社会福祉学科の中に、介護福祉士養成課程コース（以下、介護コース）、定員20名として創設された。

当時、わが国は1970（昭和45）年に高齢化社会に突入し、その後1994年には高齢社会へと進展している時期にあった。世界的にも類をみない速さで高齢化が進み、家族の抱える介護問題が大きな社会問題となっていた時期であると言えよう。そのような社会情勢の時宜を得るかのように、本学介護

コースは四年制大学で介護福祉士養成を行う全国で 2 番目（九州においては初めて）の大学として、【学部出身介護福祉士】を目指して開設された。

介護の専門職として介護福祉士が資格化されたのは、1987（昭和 62）年の「社会福祉士及び介護福祉士法」の制定に依る。当時の養成カリキュラムは一般教育科目（120 時間）、専門科目（870 時間）、実習（510 時間）に区分され、総時間数は 1500 時間であった。以降、2000（平成 12）年の社会福祉基礎構造改革という大きな福祉のパラダイム転換に合わせ、社会福祉専門職に求められる役割の拡大によりカリキュラム改正がなされた。そこでは、基礎分野（120 時間）、専門分野（1530 時間、内 540 時間が実習関係）に区分され、総時間数は 1650 時間となった。

さらに介護福祉士創設後 20 年が経過した 2007（平成 19）年の改正では抜本的な見直しが行われ、介護福祉士の定義規定が従来の三大介護（食事・入浴・排泄介助）から「心身の状況に応じた介護」に改正された。そこでのカリキュラムは、介護福祉現場での中心的役割として「期待される介護福祉士像」を示し具現化された。それは 3 つの教育領域に分けられ、人間と社会（240 時間）、介護（1260 時間、内 570 時間が実習関係）、こころとからだのしくみ（300 時間）とし、総時間数は 1800 時間に増大された。同時に、介護福祉士資格取得のどのルート（養成施設ルート、実務経験ルート、福祉系高校等）であっても国家試験合格をもって資格取得とする、つまり資格取得方法の一元化を制度化されたが、介護人材確保の逼迫状況を理由に未だに保留状態で完全実施に至っていない現状にある。

2011（平成 23）年には、訪問診療、訪問介護など医療及び福祉制度の地域あるいは在宅へのシフトに合わせ、教育領域に医療的ケア（喀痰吸引・経管栄養/50 時間）が追加され（総時間数 1850 時間）、現在に至っている（資料 1）。

国は 2000 年当初から続く介護人材の逼迫状況に対応するため、「2025 年に向けた介護人材の確保～量と質の好循環の確立に向けて～」（2015 年 2 月社会保障審議会福祉部会　福祉人材確保専門員会報告書）に取り組みを提示し進めているが、状況改善の兆しはなく介護職を巡る処遇問題等含め益々深刻さを極めている。

本学においては、介護職を巡る社会情勢の変化、介護福祉士養成に関連する諸制度の改正等はじめ 18 歳人口の減少などの要因により、徐々に定員を満たせない状況に陥り、2021（令和 3）年には遂に学生募集停止の判断に至った。それは、最後の卒業生、2024（令和 6）年 3 月修了者をもって、介護福祉士養成課程コースが閉講となることを意味していた。

創設以来、30 年間（卒業生数 355 名）に亘って介護福祉士の養成教育に尽力してきたが、そこには多くの関係団体や個人はじめ実習施設各位のご支援、ご協力なしには成し得なかったことである。

介護福祉士養成教育を終了するにあたり、最後の担当者として卒業生の現況及び学生時代の学びを振り返っての意見等を基に、本学養成教育の意義を確認し総括に代えたい。

資料１　卒業者数の推移と介護福祉士養成カリキュラムの変遷等

期	卒業年	卒業人数	カリキュラムの改正等
	＊1994 年　創設		＊1987（昭和 62）：社会福祉士及び介護福祉士法の制定 （カリキュラム総時間 1500 時間）
1	1998（平成 10）	１８	
2	1999（平成 11）	１７	
3	**2000（平成 12）**	１４	**＊2000（平成 12）：カリキュラム改正**（1500 時間から1650 時間へ）
4	2001（平成 13）	２２	
5	2002（平成 14）	２１	
6	2003（平成 15）	２１	
7	2004（平成 16）	２０	
8	2005（平成 17）	１９	
9	2006（平成 18）	２０	
10	**2007（平成 19）**	２１	**＊2007（平成 19）：抜本的な見直し**
11	2008（平成 20）	２２	**カリキュラム改正：**（1650 時間から 1800 時間へ）
12	2009（平成 21）	１３	**定義規定の改正：**（三大介護から心身の状況に応じた介護へ）
13	2010（平成 22）	１４	**資格取得方法の一元化**（現在まで保留状態）
14	**2011（平成 23）**	１７	**＊2011（平成 23）：定義規定の改正**
15	2012（平成 24）	１７	（医療的ケア／50 時間の追加：1850 時間へ）
16	2013（平成 25）	７	
17	2014（平成 26）	１８	
18	2015（平成 27）	１２	
19	2016（平成 28）	１４	
20	2017（平成 29）	４	
21	2018（平成 30）	４	
22	2019（平成 31）	３	
23	2020（令和 2）	４	
24	**2021（令和 3）**	２	**＊2021（令和 3）**以降：学生募集停止
25	2022（令和 4）	２	
26	2023（令和 5）	７	
27	**2024（令和 6）**	２	**＊2024（令和 6）**年３月閉講
	計	３５５	

Ⅰ．研究目的

本学における 30 年間の介護福祉士養成教育を閉じるにあたり、介護福祉士養成課程卒業者の動向調査を基に、本学介護福祉士養成教育の意義を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．研究方法

1.　調査方法：Googleform による WEB アンケート調査
2.　調査対象：事前調査にて「WEB アンケートに協力する」の意思表示が得られた介護コース卒業生 164 名である。
3.　調査期間：令和 5 年 6 月 10 日に WEB アンケート調査をオンライン上で公開し、8 月 17 日に締め切った。有効回答 106 名（回収率 65％）である。
4.　調査内容：(1) 属性（年齢・性別・現在有している資格・所属先・仕事内容）
　(2) 設問（自由記述式）
　①介護コースを志望した動機
　②介護コースだから学べたこと
　③社会福祉学科だから学べたこと
　④四年制大学だから学べたこと
　⑤「介護福祉士」として働くことで得られるもの
5.　データ分析

単純集計及び属性別クロス集計の結果を、内容分析により設問別にカテゴリー化を行い、その妥当性を高めるためテキストマイニング分析によるグループ化及びカテゴリー化を行った。

6.　倫理的配慮について

本学倫理審査会承認（令和 5 年 6 月 5 日）後に、調査依頼文の中で目的を明確に述べ、回答後のデータ送信をもって同意の取得とみなすこととした。個人を識別する情報（送信者のアドレス）は「取得しない」に設定した。

Ⅲ．調査結果

1．属性

1)　回答者の「年齢」を「卒後年数」に換算すると（表 1-1）、卒後 10 年未満が 41 名（38.7％）、10 年以上 20 年未満が 42 名（39.6％）、20 年以上が 23 名（21.7％）を占め、実年齢で 25 歳未満から 45 歳以上というように年齢幅がある。

2)　「性別」では、男性 37 名（34.9％）、女性 69 名（65.1％）である。

表 1-1　年齢（卒後年数）

n＝106

年齢	人（%）	卒後年数（%）
25 歳未満 25 歳以上 30 歳未満 30 歳以上 35 歳未満	2（ 1.9） 14（13.2） 25（23.6）	10 年未満（38.7）
35 歳以上 40 歳未満 40 歳以上 45 未満	18（17.0） 24（22.6）	10 年以上 20 年未満（39.6）
45 歳以上	23（21.7）	20 年以上（21.7）

表 1-2　現在有している資格（複数回答）

n＝106

資格名 人（%）	介護福祉士 106（100） *介護福祉士のみ 46 名	＋社会福祉士 52（49.1）	＋精神保健福祉士 8（7.5）	＋介護支援専門員 16（15.1）	＋その他 14（13.2）
＊その他（内訳：公認心理士 3/2.8％・認知症ケア専門士 2/1.9％・看護師 2/1.9％）・サービス管理責任者・救急認定ソーシャルワーカー・健康運動指導士・住環境コーディネーター・児童発達支援管理責任者・保育士）					

3)「現在有している資格」では（表 1-2）、介護福祉士の他に福祉領域の国家資格である社会福祉士を 52 名（49.1％）、精神保健福祉士を 8 名（7.5％）が取得している。また介護支援専門員 16 名（15.1％）や医療・福祉に関連する多様な資格を 14 名（13.2％）が取得している。

4)「所属先」では、福祉機関が 56 名（52.8％）を占め、医療機関 19 名（17.9％）、教育機関 5 名（4.7％）、一般企業 14 名（13.2％）等と続く。

5)「仕事内容別」においても、介護福祉職 37 名（34.9％）、相談職 26 名（24.5％）を主に障がい者支援 6 名（5.6％）というように、69 名（65.1％）が福祉業務に従事している。その他、事務職 7 名（6.6％）、管理職 4 名（3.8％）、教育職 4 名（3.8％）等と多岐にわたるキャリア形成の結果となっている。

2. 設問別カテゴリー化

設問 1～5 に対する自由記述内容を、内容分析による方法で全体及び属性別にカテゴリー化を行った。属性別にカテゴリー化した結果は、全体のカテゴリー化と大きな違いはみられなかった。よってここでは、全体のカテゴリー化（表 2）のみ取り上げる。

1)「介護コースを志望した動機」の全体カテゴリーは、＜①資格取得＞が最も多く、＜②人と関わる福祉関係の仕事に就きたい＞＜③周囲からの影響＞＜④福祉の仕事に興味・関心があった＞＜⑤介護を専門的に学びたい＞＜⑥入学後にコースを知った＞＜⑦超高齢社会を踏まえた就職に有利＞＜⑧実践的な介護を学びたい＞と続いている。

表 2　設問別カテゴリー化（全体）

（記述件数）

設問	カテゴリー
1. 志望動機　(106)	①　資格取得（40） ②　人と関わる福祉関係の仕事に就きたい（24） ③　周囲からの影響（10） ④　福祉の仕事に興味・関心があった（9） ⑤　介護を専門的に学びたい（9） ⑥　入学後にコースを知った（6） ⑦　超高齢化社会を踏まえた就職に有利（5） ⑧　実践的な介護を学びたい（3）
2. 介護コースだから学べたこと　(133)	①　専門的知識・技術（29） ②　介護に対する考え方や姿勢（27） ③　少人数での学び合い（25） ④　多様な実習経験からの学び（19） ⑤　理論に基づいた介護の技法（15） ⑥　実習を通した介護現場の学び（14） ⑦　論理的思考の方法（4）
3. 社会福祉学科だから学べたこと　(113)	①　社会福祉に関する幅広い知識・考え方(49) ②　社会福祉分野全般・多様な福祉分野（30） ③　対人援助職の基礎（12） ④　実習・フィールドワークを通した多様な学び（7） ⑤　学生の多様性（6） ⑥　福祉の対象の捉え方（5） ⑦　専門的かつ個性的な教員からの多様な学び（4）
4. 四年制大学だから学べたこと　(109)	①　ゆっくり時間をかけて学べた（44） ②　人との関わり（18） ③　社会性や一般常識（17） ④　幅広い学びや経験（15） ⑤　論理的思考と探究（15）
5. 介護福祉士として働くことで得られるもの　(132)	①　対人援助の魅力（27） ②　利用者から学ぶことが多い（25） ③　自己成長の機会（16） ④　介護技術（15） ⑤　有資格者の存在意義（12） ⑥　やりがい（12） ⑦　人との繋がり（7） ⑧　チームケア（6） ⑨　仕事に対する誇り（6） ⑩　社会貢献（3） ⑪　介護職の給与・処遇（3）

2)「介護コースだから学べたこと」の全体カテゴリーは、＜①専門的知識・技術＞＜②介護に対する考え方や姿勢＞＜③少人数での学び合い＞を主に、＜④多様な実習経験からの学び＞＜⑤理論に基づいた介護の技法＞＜⑥実習を通した介護現場の学び＞＜⑦論理的思考の方法＞となっている。

3)「社会福祉学科だから学べたこと」の全体カテゴリーは、＜①社会福祉に関する幅広い知識・考え方＞を主に＜②社会福祉分野全般・多様な福祉分野＞＜③対人援助職の基礎＞＜④実習・フィー

ルドワークを通した多様な学び＞＜⑤学生の多様性＞＜⑥福祉の対象の捉え方＞＜⑦専門的かつ個性的な教員からの多様な学び＞である。

4）「四年制大学だから学べたこと」の全体カテゴリーは、＜①ゆっくり時間をかけて学べた＞を主に＜②人との関わり＞＜③社会性や一般常識＞＜④幅広い学びや経験＞＜⑤論理的思考と探究＞である。

5）「介護福祉士として働くことで得られるもの」の全体カテゴリーは、＜①対人援助の魅力＞＜②利用者から学ぶことが多い＞＜③自己成長の機会＞＜④介護技術＞＜⑤有資格者の存在意義＞＜⑥やりがい＞＜⑦人との繋がり＞＜⑧チームケア＞＜⑨仕事に対する誇り＞＜⑩社会貢献＞＜⑪介護職の給与・処遇＞である。

3. テキストマイニングによる抽出語の出現回数

抽出語の出現回数が高かった（10 回以上）のは、

1）「介護コースを志望した動機」では、＜介護 60＞＜福祉 45＞＜資格 33＞＜思う 23＞＜取得 23＞＜仕事 13＞＜高齢 12＞＜学ぶ 11＞＜考える 11＞などである。

2）「介護コースだから学べたこと」では、＜介護 68＞＜実習 36＞＜学ぶ 22＞＜技術 20＞＜現場 17＞＜コース 16＞＜学べる 15＞＜先生 15＞＜知識 15＞＜多い 12＞＜ケア 11＞＜考え方 10＞＜実践 10＞＜仲間 10＞などである。

3）「社会福祉学科だから学べたこと」では、＜福祉 96＞＜社会 36＞＜学べる 25＞＜学ぶ 23＞＜幅広い 18＞＜介護 17＞＜高齢 12＞＜分野 11＞＜障がい 10＞＜知識 10＞などである。

4）「四年制大学だから学べたこと」では、＜学ぶ 27＞＜福祉 26＞＜介護 23＞＜社会 22＞＜時間 20＞＜実習 19＞＜学べる 18＞＜専門 14＞＜知識 14＞＜思う 13＞＜経験 11＞＜大学 11＞＜人 10＞＜分野 10＞などである。

5）「介護福祉士として働くことで得られるもの」では、＜介護 52＞＜人 39＞＜利用 26＞＜仕事 24＞＜思う 22＞＜現場 19＞＜得る 18＞＜福祉 18＞＜自分 17＞＜感じる 16＞＜多い 16＞＜技術 14＞＜人生 14＞＜働く 14＞＜家族 13＞＜生活 13＞＜学ぶ 12＞＜感謝 11＞＜経験 11＞＜できる 11＞などである。

全ての設問に共通する抽出語は、＜介護＞＜福祉＞＜学ぶ＞であった。

4. 共起ネットワークによるカテゴリー化

分析を行うに際し、本研究では KHcoder の共起ネットワーク機能によってグループ化及びテーマづけを行った。

1）「介護コースを志望した動機」では 6 グループに分類されたものを 3 グループに集約し、＜A）介護・福祉分野の資格を取得したい＞＜B）人の役に立つスキルを学びたい＞＜C）高齢社会を見越した仕事に就きたい＞のテーマづけを行った（表 3-1、図 1-1）。

2）「介護コースだから学べたこと」では 6 グループに分類されたものを 5 グループに集約し、＜A）体系的な実習展開による体験と理論の統合＞＜B）介護の専門的知識・技術を基にした支援の

あり方＞＜C) 個別ケアを実施するための思考過程の修得＞＜D) 同じ志をもつコースの仲間との学び合い＞＜E) 利用者の状況に応じた実践的な介護技術＞のテーマづけを行った（表 3-2、図 1-2)。

3) 「**社会福祉学科だから学べたこと**」では 8 グループに分類されたものを 4 グループに集約し、＜A) 社会福祉分野の幅広い学び＞＜B) 福祉の対象のみつめ方・向き合い方＞＜C) 福祉の視点の広がり＞＜D) フィールドワーク・現場実習での学び＞のテーマづけを行った（表 3-3、図 1-3)。

4) 「**四年制大学だから学べたこと**」では 8 グループに分類されたものを 5 グループに集約し、＜A) 時間的余裕があることで幅広い学びや経験ができる＞＜B) 社会福祉の基礎から応用までじっくり学べる＞＜C) 多様な人との関わりを通して価値観が広がる＞＜D) 様々な体験を通して社会人としての準備ができる＞＜E) 自分のペースで過ごす＞のテーマづけを行った（表 3-4、図 1-4)。

表 3-1 「介護コースを志望した動機」のカテゴリー化

	カテゴリー	グループ No（抽出件数）
A	介護・福祉分野の資格を取得したい	①（205）　③（46）→ 251
B	人の役に立つスキルを学びたい	②（63）　④（35）→ 98
C	高齢社会を見越した仕事に就きたい	⑤（19）　⑥（10）→ 29

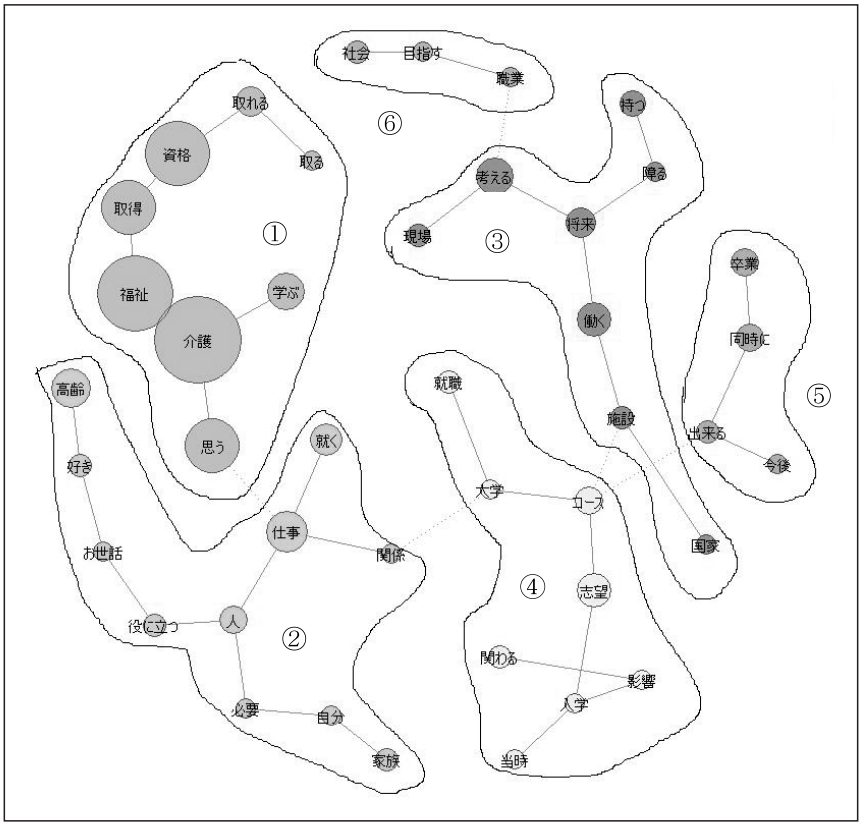

図 1-1　介護コースを志望した動機

5）「介護福祉士として働くことで得られるもの」では 6 グループに分類されたものを 4 グループに集約し、＜A）やりがいや自分自身の成長につながる＞＜B）様々な人の人生観に触れる＞＜C）介護現場の多様性から自己の介護観が問われる＞＜D）介護福祉専門職としての軸を確立できる＞のテーマづけを行った（表 3-5、図 1-5）。

表 3-2 「介護コースだから学べたこと」のカテゴリー化

	カテゴリー	グループ No（抽出件数）
A	体系的な実習展開による体験と理論の統合	②（148）
B	介護の専門的知識・技術を基にした支援のあり方	①（113）
C	個別ケアを実施するための思考過程の修得	③（71）　⑥（31）→ 102
D	同じ志をもつコースの仲間との学び合い	④（48）
E	利用者の状況に応じた実践的な介護技術	⑤（41）

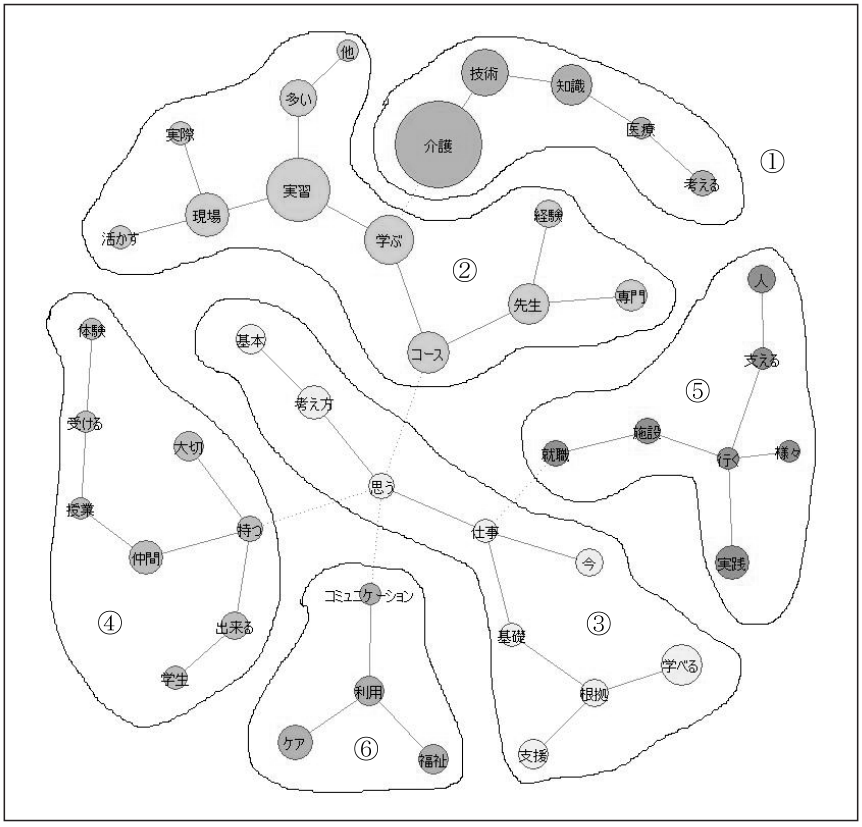

図 1-2　介護コースだから学べたこと

表 3-3 「社会福祉学科だから学べたこと」のカテゴリー化

	カテゴリー	グループ No（抽出件数）
A	社会福祉分野の幅広い学び	①（209）
B	福祉の対象の見つめ方・向き合い方	②（59）　⑥（19）→ 78
C	福祉の視点の広がり	④（30）　⑤（21）　⑦（13）　⑧（10）→ 74
D	フィールドワーク・現場実習での学び	③（53）

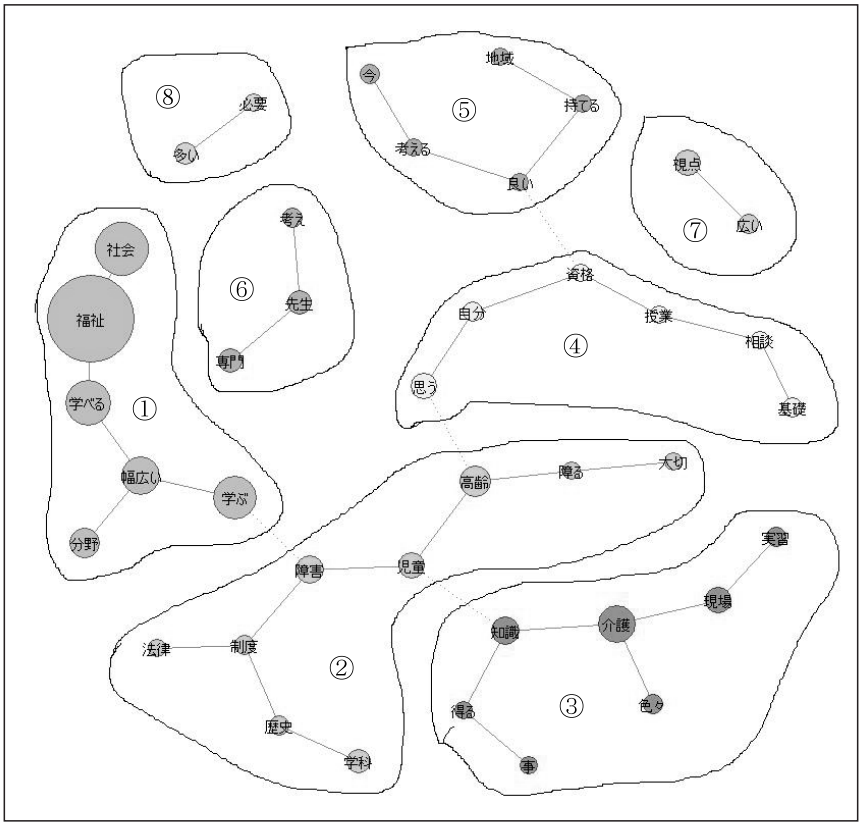

図 1-3　社会福祉学科だから学べたこと

表 3-4 「四年制大学だから学べたこと」のカテゴリー化

	カテゴリー	グループ No（抽出件数）
A	時間的余裕があることで幅広い学びや経験ができる	①（132）　⑤（33）→ 165
B	社会福祉の基礎から応用までじっくり学べる	②（109）　⑧（9）　→ 118
C	多様な人との関わりを通して価値観が広がる	③（46）　⑦（9）　→ 55
D	様々な体験を通して社会人としての準備ができる	④（44）
E	自分のペースで過ごす	⑥（12）

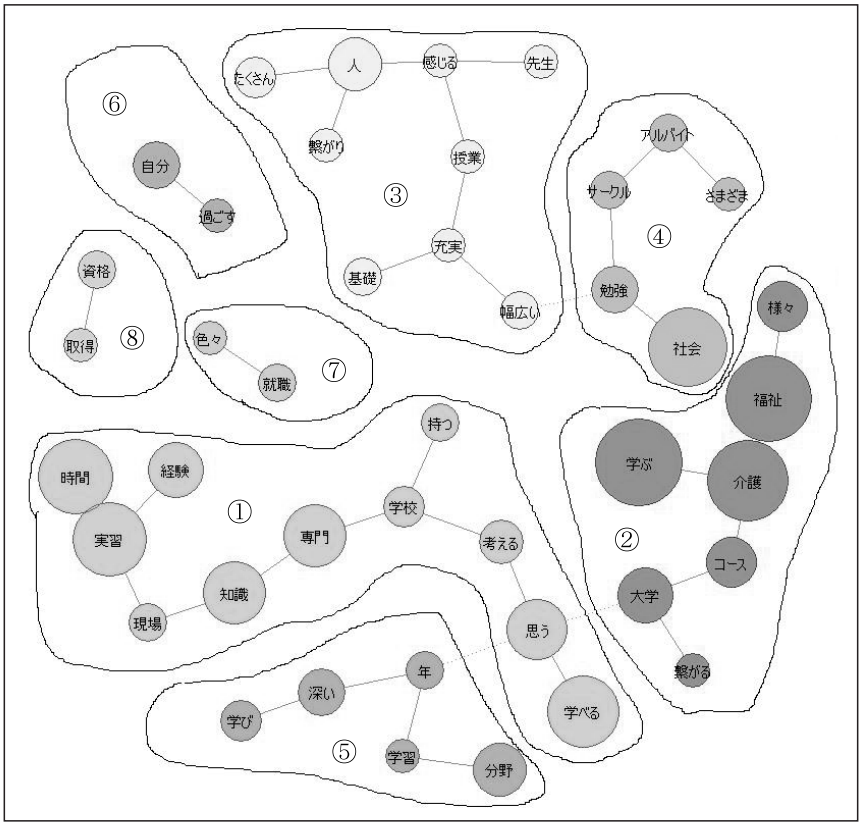

図 1-4　四年制大学だから学べたこと

表 3-5 「介護福祉士として働くことで得られるもの」のカテゴリー化

	カテゴリー	グループ No（抽出件数）
A	やりがいや自分自身の成長につながる	①（170）　⑤（50）→ 220
B	様々な人の人生観に触れる	②（116）
C	介護現場の多様性から自己の介護観が問われる	④（70）　⑥（13）→ 83
D	介護福祉専門職としての軸を確立できる	③（80）

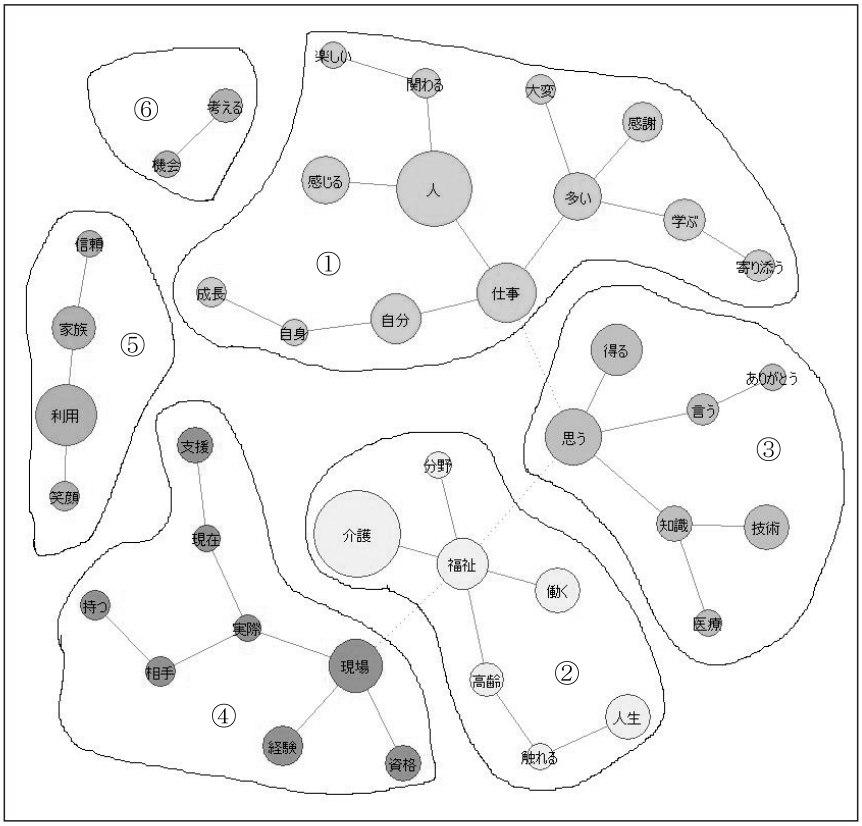

図 1-5 「介護福祉士」として働くことで得られるもの

5. 設問別カテゴリー化の対比（内容分析とテキストマイニング分析）

今回、設問の自由記述内容を内容分析による方法（数字表記）とテキストマイニング分析による方法（アルファベット表記）とでカテゴリー化を試みた。その結果は表４に示す通り、表現レベルの違いはあるもののカテゴリー自体の意味するところに大きな相違はみられなかった。

表４　設問別カテゴリー化の対比

設問（記述数）	内容分析（記述件数）	テキストマイニング分析（抽出件数）
1. 志望動機（106）	①資格取得 (40) ②人と関わる福祉関係の仕事に就きたい (24) ③周囲からの影響 (10) ④福祉の仕事に興味・関心があった (9) ⑤介護を専門的に学びたい (9) ⑥入学後にコースを知った (6) ⑦超高齢化社会を踏まえた就職に有利 (5) ⑧実践的な介護を学びたい (3)	A) 介護・福祉分野の資格を取得したい (251) B) 人の役に立つスキルを学びたい (98) C) 高齢社会を見越した仕事に就きたい (29)
2. 介護コースだから学べたこと（133）	①専門的知識・技術 (29) ②介護に対する考え方や姿勢 (27) ③少人数での学び合い (25) ④多様な実習経験からの学び (19) ⑤理論に基づいた介護の技法 (15) ⑥実習を通した介護現場の学び (14) ⑦論理的思考の方法 (4)	A) 体系的な実習展開による体験と理論の統合 (148) B) 介護の専門的知識・技術を基にした支援のあり方 (113) C) 個別ケアを実施するための思考過程の修得 (102) D) 同じ志をもつコースの仲間との学び合い(48) E) 利用者の状況に応じた実践的な介護技術(41)
3. 社会福祉学科だから学べたこと（113）	①社会福祉に関する幅広い知識・考え方(49) ②社会福祉分野全般・多様な福祉分野(30) ③対人援助職の基礎 (12) ④実習・フィールドワークを通した多様な学び (7) ⑤学生の多様性 (6) ⑥福祉の対象の捉え方 (5) ⑦専門的かつ個性的な教員からの多様な学び(4)	A) 社会福祉分野の幅広い学び (209) B) 福祉の対象の見つめ方・向き合方 (78) C) 福祉の視点の広がり (74) D) フィールドワーク・現場実習での学び (53)
4. 四年制大学だから学べたこと（109）	①ゆっくり時間をかけて学べた (44) ②人とのかかわり (18) ③社会性や一般常識 (17) ④幅広い学びや経験 (15) ⑤論理的思考と探究 (15)	A) 時間的余裕があることで幅広い学びや経験ができる (165) B) 社会福祉の基礎から応用までじっくり学べる (118) C) 多様な人とのかかわりを通して価値観が広がる (55) D) 様々な体験を通して社会人としての準備ができる (44) E) 自分のペースで過ごす (12)
5.「介護福祉士」として働くことで得られるもの（132）	①対人援助の魅力 (27) ②利用者から学ぶことが多い (25) ③自己成長の機会 (16) ④介護技術 (15) ⑤有資格者の存在意義 (12) ⑥やりがい (12) ⑦人との繋がり (7) ⑧チームケア (6) ⑨仕事に対する誇り (6) ⑩社会貢献 (3) ⑪介護職の給与・処遇 (3)	A) やりがいや自分自身の成長につながる (220) B) 様々な人の人生観に触れる (116) C) 介護現場の多様性から自己の介護観が問われる (83) D) 介護福祉専門職としての軸を確立できる (80)

Ⅳ．考察

ここでは、4つの設問「介護コースだから学べたこと」、「社会福祉学科だから学べたこと」、「四年制大学だから学べたこと」、「介護福祉士として働くことで得られるもの」の結果を基に、考察を進める。

1.「介護コースだから学べたこと」について

上述したように、今回の回答者は卒業後 10 年未満から 20 年以上というように年齢幅がみられるが、当然ながら在籍した時期によりそれぞれの養成カリキュラムに沿って学んでいるということになる。それを踏まえて学びのカテゴリーをみると、テキストマイニング分析（表 4）では＜B）介護の専門的知識・技術を基にした支援のあり方＞＜C）個別ケアを実施するための思考過程の修得＞＜E）利用者の状況に応じた実践的な介護技術＞があり、それらの学びの手段的な意味合いを持つ＜A）体系的な実習展開による体験と理論の統合＞＜D）同じ志をもつコースの仲間との学び合い＞となっている。また内容分析の全体カテゴリーにおいても＜①専門的知識・技術＞＜②介護に対する考え方や姿勢＞＜③少人数での学び合い＞＜④多様な実習経験からの学び＞などであり、表現のレベルは異なるがカテゴリーの意味に大きな相違点は見られないと考える。

これを属性の「卒後年数別」で見ると、卒後 10 年未満では＜①専門的知識・技術＞＜⑤理論に基づいた介護の技法＞＜②介護に対する考え方や姿勢＞、卒後 10 年以上 20 年未満では＜①専門的知識・技術＞を主に、＜②介護に対する考え方や姿勢＞となっている。卒後 20 年以上では、＜②介護に対する考え方や姿勢＞＜①専門的知識・技術＞である。このように、卒後年数により学びの表記が＜①専門的知識・技術＞、＜②介護に対する考え方や姿勢＞、＜⑤理論に基づいた介護の技法＞というように違いが見られるが、これらの意味する内容的な違いはないと考えられ、表記の違いの背景には、在籍時期のカリキュラム上で用いられる言葉や概念の違い、または表記レベルの違いがあると考える。それは、卒後 20 年以上のカテゴリーには、“理論に基づく”“根拠がある”“論理的”などが用いられていないことからも窺える。理論に基づく介護や根拠に基づく介護の必要性を求められるようになったのは、2000 年施行の介護保険制度下で介護が「介護サービス」として位置づけられてからであり、それがカリキュラムに反映されたのは 2007 年の定義規定の改正（心身の状況に応じた介護）からである。

以上のことから、全体カテゴリーと卒後年数による学びのカテゴリーを対比しても大きな違いは見られない。いずれも＜①専門的知識・技術＞や＜②介護に対する考え方や姿勢＞のカテゴリーが主であり、年齢幅（在籍時期）による養成カリキュラムの違いはあっても基本的な学びへの影響は見られない。また全ての卒後年数において＜①介護に対する考え方や姿勢＞という倫理に繋がるカテゴリーも見られ、専門職として基礎、土台となる学びができていると考える。

続けて、全体カテゴリー＜A）体系的な実習展開による体験と理論の統合＞については、資格創設当時より実習時間が 500 時間を超え、週数に換算すると 10 週以上になる。四年課程の早い段階から実習に出る必要があり、それは学習進度に応じた実習展開とも言える。本学では、介護コースの約 10

週間に及ぶ介護実習を充実させるために、「実習教育（経験型学習）」の概念を学生はじめ実習施設関係者等と共有し、学生、施設指導者、教員の三者が共に成長できることを目指している。実習教育の概念をそれぞれが実習でどのように具現化するとよいのか、学習者である学生を主体にして実習（学習）環境を整えることに尽力いただいている。実習期間中は週数に応じて帰校日を数回（1 週間に 1 回の目安）設定し、実習状況の把握、助言、ケースカンファレンス、次週への方向づけなど行い、適宜、学生の実習進度情報を施設指導者に提供し連携しながら学生支援を行っている。

カテゴリーに見られる「体験と理論の統合」とは、学生の実習体験を理論に繋ぎ体験の意味を探るという、体験を学習レベルへと昇華させる思考作業を指している。これは、第1段階実習から用いる日々の実習記録（実習日誌）様式に沿って個別に行う、実習終了時のグループ別まとめ（KJ 法）、第 2 段階及び第 4 段階実習では、グループ別まとめ後に個別のテーマに基づくケーススタディ（レポート作成及び発表）というように、個別の実習記録やグループ討議による方法で第 1〜4 段階の全実習において実施している。

上記で述べたように、記録の種類も少なくないが学生同士で討議をする機会が非常に多くなることを背景に、カテゴリー＜D）同じ志をもつコース仲間との学び合い＞が挙がっているものと考える。緊張を伴う実習現場の苦楽の体験は 20 名のコース仲間と共有し支え合いながら、相互に学び合う貴重な機会となる。コースという少人数であるがゆえに結束力や協調性が強まり、意見交換を行いやすくなる学習環境が有効に機能していたことを、＜A）体系的な実習展開による体験と理論の統合＞＜D）同じ志をもつコース仲間との学び合い＞のカテゴリーから読み取れる。

2.「社会福祉学科だから学べたこと」について

社会福祉学科では、テキストマイニング分析によるカテゴリー化（表 4）では、＜A）社会福祉分野の幅広い学び＞＜B）福祉の対象のみつめ方・向き合い方＞＜C）福祉の視点の広がり＞＜D）フィールドワーク・現場実習での学び＞を学べている。また内容分析のカテゴリー化では、＜①社会福祉に関する幅広い知識・考え方＞＜②社会福祉分野全般・多様な福祉分野＞＜③対人援助職の基礎＞＜④実習・フィールドワークを通した多様な学び＞などである。

これを「卒後年数別」で見ると、卒後 10 年未満では＜①社会福祉に関する幅広い知識・考え方＞＜②社会福祉分野全般・多様な福祉分野＞＜③対人援助職の基礎＞、10 年以上 20 年未満では＜①社会福祉に関する幅広い知識・考え方＞＜②社会福祉分野全般・多様な福祉分野＞＜④実習・フィールドワークを通した多様な学び＞、20 年以上では＜①社会福祉に関する幅広い知識・考え方＞＜②社会福祉分野全般・多様な福祉分野＞＜⑦専門的かつ個性的な教員からの学び＞である。いずれの卒後年数においても学びは概ね同様であり、＜社会福祉に関する幅広い知識・考え方＞を学べていることがわかる。

また全体カテゴリーの＜D）フィールドワーク・現場実習での学び＞や＜⑤実習・フィールドワークを通した多様な学び＞では、さまざまな福祉関係施設を体験することにより、介護実習施設との違いや社会福祉士としての視点、役割の違いなど、福祉専門職としての多岐にわたる広い学びを得ていることが窺える。

通常、社会福祉学科では 2 年次より社会福祉に関する専門的な学習が多くなるため、1 年次より介護福祉という福祉の一領域を既に学び始めている介護コースの学生は、介護関係の講義と並行して社会福祉分野全体の学習を進めることになる。このように 2 年次からは介護福祉とそれを包含する社会福祉とが交錯する学習によって、福祉全体における介護の位置づけがわかり、また福祉分野の児童、高齢者、障がい者福祉などそれぞれの専門領域からの講義等に伴って学びが広がっていくことで、福祉全体に向けた広い視野、視点の広がりなど対人援助職の基礎を築くうえで、相乗効果が働いていると考えられる。

特筆したいカテゴリーとして、内容分析による全体カテゴリーで（表 2）、社会福祉学科のみに学びとして上がっている＜⑤学生の多様性＞＜⑦専門的かつ個性的な教員からの多様な学び＞がある。これを属性別で見ると、＜⑤学生の多様性＞については「卒後年数別」と「性別」の全てで挙がっている。＜⑦専門的かつ個性的な教員からの多様な学び＞については、卒後 10 年以上 20 年未満と 20 年以上及び女性に見られる。

先ず＜⑤学生の多様性＞について考えると、介護コースは常に定員 20 名という小集団での学習活動である。一方、社会福祉学科における講義等はゼミ活動を除き 100 名前後の集団での受講となる。入学直後より介護コースという小集団で仲間として帰属意識を形成している学生にとっては、同学年の学科を構成する大集団に対して学生数の多さと同時に色々な考えや状況にいる学生との交流が学びの一因として刻まれる位に影響を受けたであろうことが窺える。

次に、＜⑦専門的かつ個性的な教員からの多様な学び＞については、卒後 10 年以上 20 年未満と 20 年以上の卒後年数から挙がっていることを考えると、時宜を得て新設された社会福祉学部、社会福祉学科を構成する諸先生方の熱き情熱や講義・教育に対する真摯な姿勢、学生への愛情ある眼差し等がカテゴリーから読み取れる。

3.「四年制大学だから学べたこと」について

四年制大学では、テキストマイニング分析（表 4）の＜A）時間的余裕があることで幅広い学びや経験ができる＞＜B）社会福祉の基礎から応用までじっくり学べる＞＜C）多様な人との関わりを通して価値観が広がる＞が主である。内容分析の全体カテゴリーでは、＜①ゆっくり時間をかけて学べた＞＜②人との関わり＞＜③社会性や一般常識＞＜④幅広い学びや経験＞＜⑤論理的思考と探究＞である。

これを「卒後年数別」で見ると、卒後 10 年未満では＜①ゆっくり時間をかけて学べた＞＜⑤論理的思考と探究＞＜②人との関わり＞＜④幅広い学びや経験＞＜⑤社会性や一般常識＞、卒後 10 年以上 20 年未満では＜①ゆっくり時間をかけて学べた＞＜②人との関わり＞＜③社会性や一般常識＞＜④幅広い学びや経験＞＜⑤論理的思考と探究＞、20 年以上では＜①ゆっくり時間をかけて学べた＞＜②人との関わり＞＜⑤論理的思考と探究＞＜③社会性や一般常識＞＜④幅広い学びや経験＞である。

大学での介護福祉士養成つまり職業教育は、単なる職業教育に留まらない専門職業教育の場であり、教育の質が担保されているため専門職としての高い専門性を修得できる。専門分野に精通した教員による講義・演習・実習の一貫性のある教育が展開され、探究的学習により現象の分析力、考察力、判

断力、表現力などが養われることになる。同時に、資格取得の科目に留まらず、一般教養科目の修得が求められるため幅広い分野の学習をする機会や他分野の学生、教員との交流などにより、人間的な成長を促すことができるというのも四年制大学で学ぶ意義と言える。そのことを＜②人との関わり＞＜③社会性や一般常識＞＜④幅広い学びや経験＞というカテゴリーが示唆していると考える。

これらに関する回答者の声をかりると“基礎から専門分化されたところまで細かく、体系的に学ぶことができ、自然と積み重ねながらそれぞれの繋がりを意識し学ぶことができたことは大きい（45 歳以上、女性）”や“4 年制だったから介護について深くゆっくり自分のペースで学べた（30 歳以上 35 歳未満、女性）”、“介護過程の展開や介護の基本について、一つ一つの理解を深めながら丁寧に学んでいくことができたことは四年制大学だったからこそと思う（30 歳未満、女性）”など、学生にとって 4 年間という学業に専念できる期間の有意義性を語っている。これは、学生が目指す職業に向けた職業への社会化がよりよくなされていたことを意味している。卒後年数別の全てに見られるカテゴリー＜①ゆっくり時間をかけて学べた＞と＜⑤論理的思考と探究＞は、大学という 4 年間の期間とそこでの学習の有用性を意味する学びとなっている。

また、＜C）多様な人との関わりを通して価値観が広がる＞＜D）様々な体験を通して社会人としての準備ができる＞＜E）自分のペースで過ごす＞などの学びからは、講義やゼミ活動における他者との意見交換及び活動、アルバイトを通した社会・社会人との交流などを通して、青年期の自我の確立へと繋がっていることが窺える。

以上から、4 年間という時間を介護福祉士として必要な基礎的能力を修得しつつ、同時に介護コースに限らず多くの仲間と交流しながら他者の意見を聞き、自己を見つめ、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立や社会性の獲得へと繋がっていると言える。

4.「介護福祉士として働くことで得られるもの」について

介護福祉士として働くことで得られるものとして、テキストマイニング分析（表 4）の＜A）やりがいや自分自身の成長につながる＞＜B）様々な人の人生観に触れる＞を主に、＜C）介護現場の多様性から自己の介護観が問われる＞＜D）介護福祉専門職としての軸を確立できる＞が続いている。内容分析の全体カテゴリーでは、＜①対人援助の魅力＞＜②利用者から学ぶことが多い＞＜③自己成長の機会＞＜④介護技術＞＜⑤有資格者の存在意義＞＜⑥やりがい＞などである。

これを「卒後年数別」で見てみると、卒後 10 年未満では＜④介護技術＞＜①対人援助の魅力＞＜②利用者から学ぶことが多い＞＜⑥やりがい＞、卒後 10 年以上 20 年未満では＜①対人援助の魅力＞＜②利用者から学ぶことが多い＞＜⑤有資格者の存在意義＞＜③自己成長の機会＞、20 年以上では＜②利用者から学ぶことが多い＞＜①対人援助の魅力＞＜③自己成長の機会＞＜⑤有資格者の存在意義＞などである。

さらに、属性の「現在有している資格別」に見ると、「介護福祉士のみ」の場合、＜対人援助の魅力＞＜②利用者から学ぶことが多い＞＜③自己成長の機会＞＜④介護技術＞＜②やりがい＞となっている。「介護福祉士＋社会福祉士」では＜②利用者から学ぶことが多い＞＜①対人援助の魅力＞＜⑤有資格者の存在意義＞＜⑥やりがい＞＜③自己成長の機会＞と続く。「介護福祉士＋精神保健福祉士」

では＜②利用者から学ぶことが多い＞＜⑤有資格者の存在意義＞、「介護福祉士＋介護支援専門員」では＜①対人援助の魅力＞＜③自己成長の機会＞＜④介護技術＞である。「介護福祉士＋その他」では＜①対人援助の魅力＞＜⑤有資格者の存在意義＞＜②利用者から学ぶことが多い＞＜③自己成長の機会＞である。

上記、カテゴリー＜⑤有資格者の存在意義＞は、卒後 10 年未満の年齢では見られないが、10 年以上で存在している。このことは、卒後 10 年未満では自立した介護福祉専門職としての成長過程にあり、自分自身と対利用者及び家族、チームスタッフとの関係性の中で得られた学びであろうことが推測される。一方、卒後 10 年以上になるとチームマネジメント能力も高まり、自分と対チーム、組織への参画など、広がりのある組織的な関係性の中から導き出された学びの可能性が考えられる。

また全体カテゴリー＜A) やりがいや自分自身の成長につながる＞は、カテゴリー B)・C)・D) とも関連していると考えられ、回答者の記述内容は“人と関わる仕事は大変だが感謝してもらえ自分自身の成長につながる”である。その大変さとは、介護現場の多様性と関係していると推測できる。様々な価値観や生活像を呈する利用者及び家族、チームメンバーなど、人との関わり・支援のあり方などでは、C) の“自己の介護観が問われる場面と向き合っている”ことになる。そういう場面で求められるのが、D) の“介護福祉専門職としての軸”である。回答者の声に“四年制大学を卒業し、基礎的な考えをしっかり持って働くことで、やりがいの他にも介護に関する楽しみも得られている (10 年未満、女性)”とある。 つまり、ここでいう“基礎的な考え”とは、シンボリックに表現すると介護福祉の理念と倫理に関する考え方、福祉利用者の見つめ方、課題解決能力などである。多くの卒業生が、大変な介護現場にあっても介護福祉専門職として自己の介護観を醸成しつつ、専門職として、一人の人間として自己成長していることの背景に、カテゴリー＜②利用者から学ぶことが多い＞という真摯な姿勢が窺える。

V. まとめ

本研究の目的は、“本学介護福祉士養成教育 30 年の意義を明らかにする”ことである。

ここでは、四年制大学において介護福祉士を養成するという先人の方々の熱き思いを念頭に、WEB アンケート調査における結果を「本学介護福祉士養成課程コース設置構想」に謳われている内容に照らして、まとめを組み立てる。

設置構想の概要は、下記の通りである (平成 4 年 4 月 30 日設置認可申請書一部抜粋)。

社会福祉実践の場のリーダーとなる人材の養成

— 社会福祉士・学部出身介護福祉士 —

人口構成の高齢化の問題がいよいよ深刻化するなか、従来にも増して社会福祉の発展・充実が強く求められているが、その実現には社会福祉に係わる質量ともに豊かな人材の養成A)が不可欠である。本県においても各界から介護実践の場のリーダーとなる人材B)を求める声が高くなってきている。こ

のことに鑑み、四年課程における介護福祉士養成、介護実践の場のリーダーとなる学部出身介護福祉士を考えるに至った。（中略）

実践の中で課題を発見してその回答を求める[C)]中から、介護理論・技術の発展に一定の貢献をなし得、介護福祉士集団のリーダーたりうる存在へと発達していける人材の養成が必要であり、そのためには、四年制大学における社会福祉専門教育のなかに介護福祉士養成カリキュラムを適切に位置づけていく[D)]ことが必要であろう。（下線は筆者）

1.「介護コースだから学べたこと」を基に

学びとしてテキストマイニング分析によるカテゴリー化の＜A）介護の専門的知識・技術を基にした支援のあり方＞＜C）個別ケアを実施するための思考過程の修得＞＜E）利用者の状況に応じた実践的な介護技術＞は、つまり、科学的思考能力の修得を意味している。内容分析によるカテゴリー化においても、＜⑤理論に基づいた介護の技法＞＜⑦論理的思考の方法＞など類する内容が見られる。言うなれば利用者の状況を介護福祉の視点から分析し課題解決するための思考過程を踏まえた実践に繋げる能力である。これは、介護福祉士の専門性の中核に位置する［介護過程の展開技術］であり、根拠のある介護実践のためには不可欠な能力である。この能力を修得できているか否かにより、他者への指導力が大きく影響を受ける。このような介護福祉士の中核となる能力が修得できているということは、設置構想で期待されている【実践の中で課題を発見してその回答を求める[C)]】【介護福祉士集団のリーダーたりうる存在[B)]】としての基礎的能力が構築されていると言える。

2.「社会福祉学科だから学べたこと」を基に

学びとしてテキストマイニング分析によるカテゴリー化の＜A）社会福祉分野の幅広い学び＞＜B）福祉の対象のみつめ方・向き合い方＞＜D）福祉の視点の広がり＞、内容分析によるカテゴリー化の＜①社会福祉に関する幅広い知識・考え方＞＜④対人援助職の基礎＞＜⑦福祉の対象の捉え方＞など、介護福祉領域から社会福祉全領域の学習へと進むことで、明らかに福祉の幅、視点の広がりを修得できている。これは正に、【四年制大学における社会福祉専門教育のなかに介護福祉士養成カリキュラムを適切に位置づけ[D)]】られたことによる、視野の広い介護福祉士養成の成果であると考えることができる。

3.「四年制大学だから学べたこと」を基に

学びとしてテキストマイニング分析によるカテゴリー化の＜A）時間的余裕があることで幅広い学びや経験ができる＞＜B）社会福祉の基礎から応用までじっくり学べる＞＜C）多様な人との関わりを通して価値観が広がる＞＜D）様々な体験を通して社会人としての準備ができる＞や、内容分析による＜①ゆっくり時間をかけて学べた＞＜②人との関わり＞＜③幅広い学びや経験＞＜④論理的思考と探究＞＜⑤社会性や一般常識＞など、いずれも類似する内容である。4年間という時間をかけて社会福祉領域の専門職として、また青年期にある一人の人間として、錬成されていく様態を現わしている。このような教育課程を経ることで、【社会福祉に係わる質量ともに豊かな人材[A)]】の素養が涵養さ

れ、社会（実務）経験を重ねながら福祉専門職としてのアイデンティティが確立され、職業による社会化が強化されていくものと考える。

以上のことから、四年制大学における本学介護福祉士養成教育の総括として、「本学介護福祉士養成課程コース設置構想」に謳われた意図が体現されてきたと評価できる。

一方で、ではなぜ閉講なのかの疑問も自ずと生じてくる。そのことは本稿の趣旨ではないが簡単に私見を述べたい。

1)　20 名定員のコースが半数に満たない状況になったのは 2017（平成 29）年からで、学生募集停止に至ったのは 2021（令和 3）年からである。要因は様々に考えられるが、この時期は既に全国の教育課程の別を問わず介護福祉士養成校の平均定員充足率が 5 割を切り問題視されていたことと重なる。本学は社会福祉学科の中に配置された介護コースであるため、学生の多くは社会福祉士と介護福祉士の 2 つの国家資格を目指している。資料 1 に示したように、創設当時は 1500 時間であった養成カリキュラムは徐々に時間数が増え、当時より 350 時間増え現在 1850 時間である。介護コースの授業・実習時間数の増大は、4 年間で 2 つの資格を目指す学生にとって、その両立を図る上で心身の負担が大きくなっていたと考えられる。カテゴリーに見られた＜A）時間的余裕があることで幅広い学びや経験ができる＞はずの大学生活が授業に追われ、アルバイトの時間、仲間と交流する時間の確保ができず去って行った学生も少なくない。ここには、最近の若者像として語られる若者の心身機能の低下等も関連していると思われる。

2)　上述したカリキュラムの改正には、社会情勢が大きく関与している。改正の度に介護従事者の量の確保を主眼に制度が動いてきた。その結果、遂に介護福祉士の国家試験受験者は、養成校出身者が約 1 割、実務経験ルート受験者が約 8〜9 割というように、教育機関を経なくても資格が取れるという認識を払拭できない状況が出来上がってしまっている。2007 年にどのルートであっても国家試験合格をもって資格取得とする、つまり資格取得方法の一元化を制度化されたが、未だに保留状態で完全実施に至っていない。介護福祉士を巡る社会問題は依然として山積し、多様な背景（養成校卒、実務経験者、外国人労働者等）を有する介護職の処遇問題はじめ介護福祉士に対する社会的評価が向上しているとは言い難い。それは一般的に、四年制大学卒業者であったとしても例外ではないことが、大学での資格取得希望者の減少に繋がっていることも否めないだろう。

おわりに

本調査は介護コース卒業生を対象に実施し、その回答を基に帰結した。コース卒業生は、2024（令和 6）年 3 月までに 355 名であった。今回の対象が卒業生全体の 3 割に留まったこと、壮大なテーマに対応した調査方法及び内容に検討の余地がみられることなどが、研究の限界として上げられる。

閉講を知った卒業生から［福祉現場にこれからも学園大学介護コースが生きている］［介護コースで学んだ 4 年間は福祉職の原点］［介護コースを卒業したことが誇り］［介護コースで学んだからこそ今の自分がある］等々、数え切れないほどの感謝や惜しむ声が届けられた。立場は違っても、思いは

同じである。

卒業生の今後の活躍、さらなる成長に期待したい。

謝辞

本研究における WEB アンケート調査にご協力いただきました卒業生の皆さまに心より感謝申し上げます。また、これまで本学における介護福祉士養成教育にご尽力、ご支援くださいました関係各位の皆様に衷心より御礼と感謝を申し上げます。

（本調査は、熊本学園大学付属社会福祉研究所 2023 年度調査研究費の助成により実施した。）

参考文献

1) 樋口耕一・中村康則・周景龍：『動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング－フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の軽量テキスト分析』ナカニシヤ出版、2022.
2) 末吉美喜：『テキストマイニング入門』オーム社、2020（第 5 冊）.
3) 牛澤賢二：『やってみようテキストマイニング－自由回答アンケートの分析に挑戦－』朝倉書店、第 2 刷、2018.
4) 横山孝子：「介護福祉学的認識の形成をめざした介護福祉教育の方法－介護福祉士旧カリキュラムにおける教育実践の総括－」『熊本学園大学論集 総合科学』第 17 巻第 1 号、2010.
5) 横山孝子、坂田千賀子、江口リサ：「介護福祉教育とリカレント教育－介護福祉士養成課程卒業生の動向調査から－」『社会関係研究』第 14 巻第 2 号、2009.
6) 横山孝子：「生活支援専門職としての介護福祉士養成カリキュラムの検証」『社会関係研究』第 12 巻第 1 号、2007.